

〈論文〉

韓国における最新の教育動向と英語教育 —韓国の学校教育視察に関する記録—

太田 かおり*

要旨

本稿では、日本教職員団として韓国の小学校・中学校・高等学校を訪問した際の筆者の視察記録をもとに、韓国における学校教育の現状を可能な限り詳しく報告する。併せて、日本と韓国の学校教育の共通点や相違点についても具体的に考察する。学校教育視察で得た気付きや学びを広く発信し情報を共有することによって、日本の学校教育へ還元し、さらなる日本の学校教育、英語教育、ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育)ⁱ、GCED (Global Citizenship Education: 地球市民教育)ⁱⁱ等の発展に寄与することを目指す。また、1997年から開始された韓国の小学校英語教育をめぐる成果と課題についても言及する。韓国における小学校英語教育の成果と課題は、2020年に小学校高学年の英語教育が教科化される日本においても示唆に富むものであることが期待される。

キーワード：韓国の教育動向、小学校英語教育、ESD (持続可能な開発のための教育)、GCED (地球市民教育)、英語村

はじめに

「教育の目的は、唯才徳の発達を促すに外ならざれども、其の方法、千差万別に、際限あるべからず。」ⁱⁱⁱ (福沢諭吉『開口笑話・序文』)

* おおた かおり、九州国際大学 現代ビジネス学部 国際社会学科、k-ota@cb.kiu.ac.jp

福沢諭吉は教育の在り方やその方法について、「教育の目的は、才能や人としての徳の発達を促すものに他ならないが、その方法は多様にあり、これで限界というものがあるとはならない。」と説いており、教育に携わる者は常により良い教育の在り方と方法を模索し、探究し、工夫し続けることが重要であると謳っている。

学校教育には、時代を経ても決して変わることのない本質性と、時代と共に柔軟に変化し対応していく先進性との両方を兼ね備えていることが求められる。個と個、個と地域、個と社会、個と世界との繋がりを教える重要な場である学校は、グローバル時代の担い手となる子供たちに何を教え、どのような資質・能力を育み、どのような人財として広い世界へと送り出して行くのか。今、激動の時代の流れの中で、学校教育の在り方がますます問われている。

人も物も、あらゆる物事は比較対象の存在によって、その異同すなわち共通点や相違点が顕在化し始める。自己を知るためには他者の存在が不可欠であると同様に、学校教育についても同じことが言える。恒常的な環境や類似の状況にばかり身を置いていると、安定感が増し経験値は上がる一方で、思い込みや限定的な世界観に囚われ、思考の深まりや視野の広がりや狭く小さくなってしまふことが懸念される。筆者が海外の学校教育視察を行う一番の動機は、まさにこの比較対象を求めてである。日本の学校教育の優位性や課題点を新たな視点から捉え直し、さらにより良い教育の在り方を模索するためにも、日本から一歩離れてみることは極めて重要なことである。内側からは見えなかったものが、外側から離れて見つめ直すことによって、客観性が生まれ、視野が広がり、全体像やより広大な世界の存在が新たに見え始める。「世界」を視野に入れた新たな視点が生じることによって、グローバル時代の学校教育の在り方をより柔軟でより創造的な観点から思考することが可能となる。

このような動機のもと、筆者は海外の学校教育の様子や教育関連施設を視察するため、国際連合大学及び公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO^{iv}）主催、文部科学省後援に

よる国際交流プロジェクトへ2009年と2017年に参加した。2009年には中国政府日本教職員招へいプログラムに参加し、日本教職員訪問団として中国の学校や教育関連施設を公式に訪問した^v。2017年には韓国政府日本教職員招へいプログラムの日本教職員訪問団の団長として、韓国の学校及び教育・文化施設を視察した。本稿は、韓国における教育訪問の記録である。

韓国政府日本教職員招へいプログラムは、日本の教職員団が7日間（2017年7月11日から7月17日）に亘って韓国を訪問し、都市部とその他の地域にて現地の学校や教育関係機関、文化施設、一般家庭などを訪問することによって、韓国の教育・文化に関する理解と交流を深めることを目的としている。訪問先の学校では、学校施設見学や授業参観、教職員や児童・生徒との国際交流、質疑応答や意見交換などを相互に行うとともに、日本の教職員が日本文化を紹介する授業実践なども行った。

本稿では、日本教職員団として韓国の小学校・中学校・高等学校を訪問した際の筆者の記録資料や記録写真をもとに、韓国における学校教育の現状を可能な限り詳しく報告する。併せて、日本と韓国の学校教育の共通点や相違点についても具体的に考察する。韓国の学校教育視察で得た多くの気づきや学びを広く発信し情報や体験を共有することによって、日本の学校教育へ還元し、日本における学校教育や英語教育、ESD（Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育^{vi}）やGCED（Global Citizenship Education: 地球市民教育^{vii}）等のさらなる発展に寄与することを目指す。また、1997年から開始された韓国の小学校英語教育をめぐる成果と課題についても言及する。韓国における小学校英語教育は実施から既に20年の年月が経っており、この間の成果と課題は、2020年に小学校高学年の英語教育を教科化する方針で改革を進めている日本の小学校英語教育においても、示唆に富むものとなるであろう。

韓国政府日本教職員招へいプログラムの詳細と視察の記録

目的^{viii}

プログラムの目的は、以下の5つである。

1. 韓国の初等中等教育における教育制度及び教育課題への理解を深める。
2. 韓国におけるESD（持続可能な開発のための教育）とGCED（地球市民教育）などの好事例を探る。
3. 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
4. 日韓教職員及び児童・生徒等との交流を通じ、相互理解と友好の促進を図るとともに、将来の継続的な学校間、教育委員会間の交流の基礎を作る。
5. 世界遺産見学やホームビジットを通じ、韓国文化への理解を深める。

活動内容

プログラムの活動内容は、以下の3つである。

1. 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校や教育施設訪問を通じて、ESD（持続可能な開発のための教育）やGCED（地球市民教育）を含む韓国の最新の教育政策・現状を視察する。
2. 訪問先にて韓国の教職員・児童・生徒と交流し、日本の文化やESDを紹介する。
3. 世界遺産見学やホームビジットを通じ、韓国文化を理解する。

視察団

2017年度韓国政府日本教職員招へいプログラムの視察団の構成は、以下の計49名である。日本教職員団の団長は、筆者が務めた。

1. 韓国教職員招へいプログラム受入れ都市の教育委員会または学校が推薦する全国の小学校、中学校、高等学校及び大学の教職員、または公募により

- 選抜された教職員 計44名
2. 文部科学省職員 2名
 3. 国際連合大学職員 1名
 4. ACCU職員 2名

日程及びスケジュール

2017年6月10日と7月10日に、成田にて事前オリエンテーション及び打ち合わせ等が行われた。また、2017年7月11日～7月17日の7日間に亘り韓国を訪問し、学校や教育・文化施設の視察を行った。

表1 2017年度韓国政府日本教職員招へいプログラムの日程及び主なスケジュール

日程	日付	訪問都市	活動内容・訪問先
第1日目	7月11日	ソウル	ソウル到着、韓国現地オリエンテーション、開会式、韓国の教育制度紹介、 <u>歓迎晩餐会（ソウル）</u>
第2日目	7月12日		ソウル ^{アンソン} 安川小学校（ユネスコスクール）訪問及び韓国教職員・児童との交流
第3日目	7月13日	忠清北道 ^{チェンギョンブクト}	忠清北道 ^{チェンギョンブクト} 教育庁、陽青中学校訪問、陽青高等学校（ユネスコスクール）訪問及び韓国教職員・児童・生徒との交流、 <u>英語村（Cheongju English Center）</u> 視察、 <u>歓迎晩餐会（忠清北道）</u>
第4日目	7月14日		
第5日目	7月15日		地域遺産（金属活字伝授館、清州古印刷博物館）訪問、情報共有会、 <u>ホームビジット</u>
第6日目	7月16日	仁川 ^{インチョン}	報告会、閉会式
第7日目	7月17日		仁川出発、帰国

以下は、韓国政府日本教職員招へいプログラムにてソウル市内及び忠清北道^{チェンギョンブクト}の教育機関（教育委員会、小学校・中学校・高等学校）や文化施設を訪問した

際の筆者による視察記録^{ix}をもとに、韓国の学校教育の現状を記したものである。「国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書」に筆者が執筆した内容に加筆したものを一部含む。本稿は、表1に下線を付した訪問先（歓迎晩餐会〔ソウル〕、ソウル^{アンソングン}安川小学校〔ユネスコスクール〕、忠清北道教育庁、陽青中学校、陽青高等学校〔ユネスコスクール〕、英語村〔Cheongju English Center〕、ホームビジット）に焦点を当てて論じることとする。

i. 韓国の小学校英語教育について - 歓迎晩餐会における会談の記録より - (都市：ソウル)

韓国へ到着初日の歓迎晩餐会では、日韓両国の教職員や関係者らが一堂に集い、懇親と交流を通じて友好を深めた。両国の教職員がそれぞれに準備してきた歌を日本語や韓国語で披露し合い、終始和やかな雰囲気の中、心を通わせ合うひと時を過ごした【写真1】。

歓迎晩餐会の席では、ユネスコ韓国委員会事務総長のキム・グアンホ氏との会談にて、韓国の小学校英語教育について詳しく話を伺った。以下は、キム氏との会談記録をもとに、韓国の小学校英語教育事情について紹介する。

実に今から20年前の1997年、韓国では小学校英語教育が小学校3年生から

開始となった。韓国では十分な準備と試行期間を経ることなく全面实施に至ったため、学校教育現場や保護者、社会からの反発も大きかった。スピード感溢れる対応は、成果と課題を混沌ともたらしつつも、韓国社会の中で年月をかけて醸成され、現在に至る英語教育の充実と深化を図っていった経緯が伺えた。



写真1 歓迎晩餐会（ソウル）

韓国では、それまで中学校1年生から開始していた英語教育を、小学校3年生から必修化し、学年進行で導入している。翌年には小学校3・4年生、翌々年には小学校3・4・5年生、さらにその翌年には小学校3・4・5・6年生を対象とする経過で実施している。しかし、小学校への英語教育導入初年度は、小学校3年生のみの導入であったため、当時の小学校4・5・6年生は全く英語教育を受けないまま中学校へ入学することとなり、英語教育に穴ができてしまった。このような導入過程に対し、保護者や児童、生徒、社会からの反発は想像以上に大きかったという。最大で3年間に亘って生じる英語教育の穴は相当大きいと考えたようで、不公平感と焦燥感を抱いた当時の小学校4・5・6年生は、この穴を埋めるため、学校ではなく個人で私塾等へ熱心に通うことによって英語学習の補填と穴埋めを講じた者が多くいたそうである。韓国では、1997年から英語教育は正式に小学校3年生から必修となったが、英語教育の導入初年度の対象学年をめぐる混乱状況を振り返り、キム氏は「導入初年度の対象学年は小学校3年生からではなく、小学校6年生から段階的に対象学年を増やす方法で進めればよかった」と感想を漏らしていた。この点に関して言えば、日本では既に2011年から小学校5・6年生を対象に外国語活動が必修化されており、今後2020年の全面実施へ向けて段階的に小学校3・4年生に外国語活動、小学校5・6年生に外国語科教育が実施される方向で改革が進んでいる。したがって、韓国が小学校英語教育導入直後に混乱を招いた「最大で3年間分の英語教育の穴」は、日本では事前に対策が講じられて改革が進んでいるため、韓国で生じた問題は、日本では生じない。

韓国では、大統領交代に伴って教育改革も同時に行われるため、それまで採用されてきた教育方針が継承されず大きく一変される傾向が強いようである。1997年の小学校英語教育改革の背景にも、当時の大統領交代が少なからず影響しており、試行期間なしに突然開始されたことにもその傾向が窺える。1994年に韓国が世界貿易機構(WTO)に参加したことが契機となり、韓国社会全体における国際化の流れが加速した^x。当時の金泳三政権下の世界化政策

の一環として、小学校における英語必修化が一気に具体化し、実施に至った。

ここで、韓国における小学校英語教育開始当初の主な問題点を整理すると、次の2つであることがわかる。第一に、英語教育の開始学年を3年生とし、初年度に3年生のみから開始したため、英語教育を受けられない学年（開始初年度当時の小学校4・5・6年生）が生じてしまったことである。これに付随して発生した課題については、既に述べたとおりである。

第二に、小学校英語の指導者不足の問題である。この問題は、日本でも同様の問題が生じているが、対策が日本と韓国では大きく異なっている。日本では、学級担任が英語を指導することを原則としているのに対し、韓国では、英語専科教員が原則指導している。韓国における小学校英語指導者不足の問題は質・量ともに課題であり、小学校英語教育開始当初から90年代後半までは、中学校英語教員免許を持っている教員が研修を経て専科教員として多くの小学校で英語を教えていた。この割合を尋ねると、開始当初から現在に至るまで、実に90%以上が英語専科教員であるというから驚く。専科教員とは、英語や音楽、美術、体育などの科目に特化し、学級担任をもたずに該当科目のみを専門で教える教員のことである。場合によっては、英語が得意な小学校教員が学級担任を持ちながら英語を教えるというケースも稀にあったが、開始当時その割合は極めて低かったという。韓国では、小学校英語開始初年度から英語の指導はほぼすべての小学校で英語専科教員が行ってきた。小学校に多くの英語専科教員を導入した理由を尋ねたところ、「英語は誰もがそう簡単に指導できる科目ではない」という回答であった。実に明快な返答が印象的であった。韓国では、英語教育を小学校3年生から導入するにあたり、指導者の指導力の質を第一に優先して求めたことがわかる。指導者の質の確保に向けて、国を挙げて予算や人材支援に集中して取り組んだことは、評価に値する。2000年以降に入ると、英語を指導する教員が各小学校に十分に供給されたため、中学校の教員が小学校へ専科教員として指導に行くことは徐々に少なくなったという。さらに、小学校英語教育の質を高めるため、90年代には多くのネイティブ教員を

採用し、2000年には1万人のネイティブ教員が韓国の全ての小学校に各校1名ずつ配属された。なお、韓国の小学校英語に配属されたネイティブ教員は、単独で授業担当を任せられている。そのため、使用言語は授業の大半が英語のみで行われている。2017年現在は、およそ半数の5000人のネイティブ教員が配属されており、2000年から2017年にかけてネイティブ教員数が半数に減少した背景には、若手教員をはじめとする小学校教員の英語指導力が向上したため、との説明であった。近年、韓国社会全体で英語熱が高まっており、英語学習に対する生徒や保護者のモチベーションは全体的に高い。小学校時代から学校の授業に加えて私塾に通う者も多く、大学時代には1年間の英語圏留学を経験する学生も珍しくはない。そのため、韓国における英語力向上の背景には、学校教育の成果のみならず、これに加え、生徒たちの多くが自ら高いモチベーションを維持しつつ自発的に放課後学習や私塾へ通い、さらなる英語学習を重ねていることが大きく影響していると言える。これからのグローバル社会を見据え、生徒自らが率先してより実践的な英語力を身に付けるための努力を日常的に行っている様子が鮮明に伝わってきた。厳しい現実ではあるが、児童や生徒の英語力レベルが向上するに伴い、英語の指導が難しくなった高齢教員や英語が苦手な教員の中には、早期退職を希望する者も多く出たという。学校（生徒・教員）・家庭（保護者）・社会における英語教育への熱心な取り組みと高いモチベーションが影響して、韓国では英語力を向上させる効果的なサイクルが目を見張る勢いで加速しながら回っているようである。

一方、日本では小学校英語は原則として学級担任が行うこととなっており、ALTとともに指導する場合も学級担任が主たる指導者として授業を行うことが基本となっている。そのため、英語の専科教員が指導を行う学校はごく一部の自治体や学校に限られているのが現状である。これについては、小学校英語をめぐる教育観や指導観が日本と韓国では異なっているため、一概にどちらが良い・悪いという単純な議論は適さない。しかし、小学校教員への過度な指導負担、指導者の英語力・指導力不足、音声敏感期における指導の重要性、英語

の教科特性や専門性を総合的に勘案すると、小学校における英語教育は、小学校英語教育に関する適性と専門性を兼ね備えた専科教員又はネイティブ教員を指導者とすることが望ましいのではないかと筆者は考えている。とりわけ、小学校高学年にあたる5・6年生の指導については、2020年に「外国語科」として教科化されることに伴い、指導と評価の両方を適切に行える資質・能力を備えた指導者が求められるようになることは明らかである。全国に2万校^{xi}を超える公立小学校が存在している日本において、英語専科の導入には膨大な予算と人材支援が必要となることを承知の上で、先人が遺した「教育は、未来への投資である」という言葉を敢えてここに記したい。グローバル社会を逞しく生き抜く子供たちの育成を見据え、今後日本において、国の予算措置や人材支援も含めた小学校英語教育への専科教員導入をめぐる議論が、ますます活発化・具体化することを大いに期待したい。

韓国へ到着初日の晩餐会にて、ユネスコ韓国委員会事務総長のキム氏と小学校英語教育をめぐる会談に花を咲かせた。そして、日本と同様に韓国でも、小学校英語教育の導入当初には多くの克服すべき課題が生じていたことが理解できた。韓国の教育改革は、良く言えばスピード感があり、悪く言えば準備不足で見きり発車の印象を受ける。一方、日本の教育改革は、事前に入念な計画と見通しを立て、石橋を叩くように慎重に改革を進めていく。しかし迅速さに欠けるため改革に年月を要し、本格的に改革が動き始めた頃には既に時代がさらにその先へ進んでいるということも考えられるため、この点が課題である。訪韓中、韓国側の教育関係者が述べた「韓国は何でもすぐに始めるので、スピード感はあるが失敗も多い。日本はじっくり検討して段階的に物事を進めるので、失敗は少ないが遅い」という言葉が印象に残っている。

韓国の小学校英語教育は1997年に本格化し、現在至る。英語のスキル教育に特化してその成果を客観的に評価するならば、韓国の英語教育は一定の成果を挙げていると言ってよいであろう。一方、日本では2020年から小学校英語教育は本格化する。日本と韓国の小学校英語教育の取り組みには既に20年以

上もの歳月差が生じていることを我々は認識しておく必要があるであろう。その上で、グローバル時代における日本の英語教育はどうあるべきか今一度再考し、未来を生きる子供たちに英語教育が果たす役割とその重みを再確認し、これからの指導に向き合っていく必要があるであろう。

2020年度より、日本では小学校3年生から外国語活動が開始となり、5・6年生の英語教科化が実施となる。グローバル時代を生きる子供たちにとって、英語教育の充実が子供たちの未来を切り拓く鍵の一つに成り得ると考えている。英語教育を担う者の一人として、その責任の重さをあらためて実感する貴重な機会となった。

ii. ソウル^{ソウル}安川^{アンガム}小学校（都市：ソウル）

ソウルにあるソウル^{ソウル}安川^{アンガム}小学校は、1991年に開校した公立小学校で、一般学級16クラス、特別支援学級1クラスからなる全校児童数308名、教職員27名、支援員27名の小規模校である【写真2】。1クラスの児童数は平均19.3名と少人数で、細やかな指導が行き届くクラス規模である。韓国では少子化の影響もあって比較的小規模で少人数のクラスが一般的であるという。今回訪問した小学校ではどの学級も児童数は20名前後となっており、目が行き届く教育環境が整っていた。ESDならびにGCEDの充実にも力を入れており、先進的



写真2 小学校の校舎
（ソウル安川小学校）



写真3 校長による学校紹介
（ソウル安川小学校）

な取り組みを行っている小学校である。

学校訪問団の歓迎式の冒頭で、校長のイ・チュンヒ氏より学校の教育方針や特色についての紹介があり、「互いに理解し、共感し、行動する力を備えた世界市民の育成を目指している」との説明があった【写真3】。また、特に力を入れている3つの教育の柱として、1) 様々な教育活動やサークル運営を通じて世界市民教育プロジェクトに取り組んでいること、2) 優れた人柄をもち、他人と協力し配慮し合える品性教育に力を入れていること、3) 読書後に感想や意見を分かち合う学校文化づくりを目指し、読書教育に力を入れて取り組んでいることが紹介された。

学校紹介の後、学校内外を見学した。学校施設では、充実した教材準備室が強く印象に残っている。教材準備室には常駐のスタッフが1名配属されており、室内には壁一面迷路のように棚が規則的に配置されていた【写真4】【写真5】。棚には順番に番号が振られていて、どの番号に何がストックされているかは一覧でわかるようになっており、授業で使用する教材・教具が整然と収納されていた。例えば、各教科で使用可能な画用紙やマジックペン、色紙や文房具にはじまり、書道で使用する筆や硯、美術の絵具やパレット、数学で使用する教師用三角定規やコンパス、体育で使用する縄跳びやボール類等、全教科に亘って使用され得るありとあらゆる教材・教具がこの部屋に集中管理されて



写真4 教材準備室とスタッフ
(ソウル安川小学校)



写真5 教材準備室の陳列棚
(ソウル安川小学校)

おり、教員は必要な時にこの部屋を訪れて借用し授業の準備をする。教材準備室には常に専属スタッフがいるため、借用と返却の記録が丁寧に記録されていた。物置のように使われなくなった教具が雑然と置かれているのではなく、また、教具が返却されず他の教員の授業運営に支障が出るというようなことが起らないよう収納方法やシステムが工夫されていた。教材準備室は、学校施設の中でもどちらかというあまりスポットがあたることのない場所であるが、質の高い授業や円滑な授業運営を陰で支える存在として、今回見学した教材準備室のシステムはとても有意義であると感じた。その後、理科実験準備室、コンピューター室、屋外の植物庭園や畑などを見学したが、これらの施設については日本の小学校における施設と大きな違いはないと思われた。

校内見学中に特に目を引いたのは、教室や廊下の壁面に掲示された掲示物の美しさである。立体的な装飾を施しているものが多く、例えば、教室後方の掲示物用ボードには色彩豊かな折り紙や色画用紙を使って作られた花や蝶々が装飾されていた【写真6】【写真7】。これらはいずれも立体的な三次元で豊かに表現されており、際立った美しさが大変印象的であった【写真8】【写真9】。これは、韓国の学校教育が力を入れている3要素（①英語教育、②IT教育、③芸術）のうちの芸術教育の成果であろうと見て取れた。「人や物をいかにより美しく見せるか」に対する美的感性教育にも力を注いでおり、この点の教育



写真6 教室内の美しい掲示物
（ソウル安川小学校）



写真7 立体的な掲示物
（ソウル安川小学校）



写真8 児童による立体的な作品
(ソウル安川小学校)

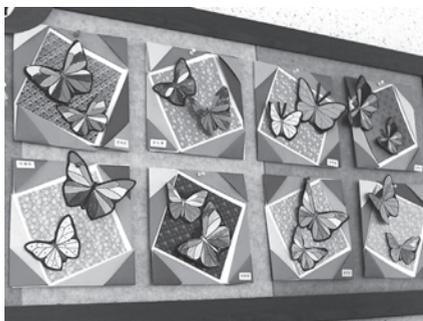


写真9 児童による立体的な作品
(ソウル安川小学校)



写真10 防犯カメラの注意喚起
(ソウル安川小学校)

が小学校時代から充実しているように思われた。

次に、児童の安全面と健康面に対する配慮について紹介する。小学校入口の校門と裏門には保安官の駐在所があり、出入者のチェックが行われていた。さらに、校舎内外の至るところに複数の防犯カメラが設置されており重々しい雰囲気を感じた

が、防犯意識の高さが窺えた【写真10】。校舎内における防犯カメラの設置については、防犯上の問題とプライバシー保護との観点から賛否意見が分かれる可能性もあるが、ここでは視察校の特色の一つとして紹介するに留めておく。

児童の健康面に配慮した取り組みとして、PM2.5問題への対応策が興味深かった。毎朝その日の「PM2.5情報」が保健室から各教室内に設置された教員用パソコンへ配信されており、教室の窓の開閉や屋外活動の可否を判断する情報として活用されていた。また、学校給食の食材には有機食材を使用するなど、安心・安全を重視する取り組みや工夫が見て取れた。

ここで、放課後のクラブ活動や部活動をめぐる日本と韓国の違いについて紹

介する。韓国では、特技適性教室という活動時間があり、これは日本のクラブ活動や部活動に該当する。通常の授業とは別に外部指導者が訪れ、約20種類の放課後活動が行われていた。韓国では、放課後のクラブ活動にあたる特技適性教室を希望受講する児童が多いとのことであるが、この活動の指導者は基本的に外部の講師や指導者であり、受講料は全て有料で児童の保護者が負担している。このような方針は韓国では一般的とのことで、ソウル^{アソクソン}安川小学校が特別というわけではない。通常の授業は教員が行い、放課後のクラブ活動や補習授業は外部講師が有料で指導を行っていた。この点は、日本の学校教育とは大きく状況が異なっている。放課後や早朝の課外授業や部活動指導が教員にとって負担過多となっている日本の学校教育では、教科指導以外の教師の負担が大きいと言わざるを得ない。韓国が導入している外部指導者や支援員の活用方法については、日本の教職員の負担軽減策の一つとして、大いに参考になり得ると感じた。

授業参観では、国語の授業を見学した【写真11】。授業は貧困をテーマに、電子黒板や映像資料を効果的に活用しながら進められていた。グループ活動になると児童は速やかに机を動かし、4～5人に分かれてペアワークやグループワークを行った。教師と児童の間では積極的に会話のやり取りが行われ、双方向型授業が実施されていた。指導の内容や指導の在り方に関しては特段目を引くものはなかったというのが率直な感想であるが、児童は教師の問いかけに対し、問題意識を持ちながら自らの考えをしっかりと発表しており、また、他の児童は学級の生徒の発言に頷いたり拍手したりして応えながら、相手の意見を尊重する様子が窺えた。意見を堂々と発言するだけでなく、相手の意見にもしっかり



写真11 授業風景（ソウル安川小学校）

と耳を傾け、決してからかったり冷やかしたりすることなくクラスの皆が互いの意見を尊重し合う様子は、とても自然体で素晴らしかった。このような学級文化の形成は、グローバル時代を柔軟で協働的に生きる子供たちの育成には極めて重要な要素の一つであると考えている。

その後、日本から訪韓した教職員団は、韓国の小学生を対象に日本文化を紹介する授業を各教室に分かれて実施した。万華鏡作り体験や風呂敷の包み方体験、剣玉の歴史や遊び方、カルタ遊び、折り紙、かぶと作りや福笑い体験など、計8クラスに分かれて日本文化体験の授業を子供たちに行った。残念ながら筆者は韓国語の知識が皆無であるため、ジェスチャーや映像写真資料などを駆使し、部分的に通訳を介しての万華鏡作りとなった。言語が通じないもどかしさを痛感した授業実践であったが、日本の伝統遊びや文化を学ぶ授業は、韓国の児童たちにとって楽しく興味深い時間であったようだ。子供たちは素直で生き活きと活動に参加していた。出来上がった万華鏡をゆっくりと回しながら覗き込む瞳は真剣そのものであった【写真12】【写真13】。美しい花模様が次々と形を変える不思議な万華鏡の世界に引き込まれ、夢中になって見入っている様子だった。日本と韓国は、国は異なっても、子供たちの学ぶ姿や興味あることへ向けられる真っ直ぐな眼差し、そしてキラキラした瞳や笑顔は、万国共通の輝きなのだとあらためて実感した。その後、日本の文化授業を行った教室



写真12 万華鏡を作成する児童
(ソウル安川小学校)



写真13 万華鏡を覗き込む児童
(ソウル安川小学校)

で、児童らと一緒にお昼の給食を囲んだ。

以下に、韓国の給食時間について詳しく紹介する。給食時間の過ごし方については、いくつかの点において日本と韓国に顕著な違いが見られた。配膳については、学級担任ではなく外部スタッフ^{xii}が給食の配膳準備やつぎ分け作業を行っていた【写真14】。各教室前の廊下には1～2名の外部配膳スタッフが待機しており、子供たちは一人ずつ並んでお盆に給食を乗せてもらう。学級担任は配膳作業を手伝うことはなく、教室内外を見回ったり、子供たちと一緒に給食を食べたりして過ごしていた。廊下で外部スタッフがつぎ分けたご飯やおかずをお盆に乗せて教室の自席に着席した児童は、思い思いのタイミングで食べ始め、食べ終わった者から食器とお盆を返却し、その後の昼休みを自由に過ごす。「いただきます」や「ごちそうさま」の合図はなく、グループやクラス全員が揃うのを待って食べ始めるという習慣もない。驚いたのは、給食のおかずや飲み物を残す児童も多く、そのまま返却処分していた。学級担任や外部スタッフがこれに対して食事指導を行うことはなく、子供たちの中には食べ残しや好き嫌いも多く見受けられた。給食が不味いのかと言えば、そうではない。この日はビビンバとスープ、飲み物とデザートというメニューで、筆者も子供たちと同じ給食を頂いたが、大変美味しかった【写真15】。特に訪問校の給食は、食材の安全性にもこだわっており、美味しいと評判も高い。実際のところ、給



写真14 給食配膳スタッフと児童
（ソウル安川小学校）



写真15 学校給食（ソウル安川小学校）

食が不味いと児童や保護者からクレームが学校に入るそうである。要するに、韓国の給食時間はあくまでも食事の時間であり、それ以上でも以下でもない、という位置づけに見て取れた。なお、韓国の小学校・中学校・高等学校での給食は国から補助されているため、原則無料である。

この点に関して、日本の給食指導は世界的に見てもユニークで、教育的な配慮と奥深さを秘めていることがわかる。今回、韓国で給食時間を子供たちと過ごしながら、日本の学校教育の優れた面が鮮明に浮かび上がってくる体験の一つとなった。日本の学校教育では、給食指導に限らずあらゆる活動を人間教育に繋がる活動として捉えており、一つひとつの活動に深い教育的意味を持たせ、指導が行われている。例えば、給食時間を通して、食べ物や粗末にしない心や命の大切さ、食材の生産者や調理してくださった方々への感謝の気持ち、栄養バランスに配慮して残さず食べることの重要性、皆が揃うのを待って食べることで集団意識や協調性を育み、平等に分ち合うことで共に助け合うことの大切さを学ぶ。大震災の時にも、日本人が食料や水を皆で分ち合いながら助け合う姿に世界中の人々が感動し涙したが、これは日頃の学校教育や家庭教育を通じて、分ち合い支え合うことの大切さを常に学んできたからであろう。さらに、食事のマナーや衛生面、配膳や片付けに関する指導も徹底して行われており、日本の学校教育は「給食」という時間を通して多岐にわたる教育的指導を行っている。単に空腹を満たすだけの時間ではないのである。日本の給食文化の素晴らしさにあらためて気付かされ、感動すら覚えた。そして日本の学校教育が当然のこととして取り組んでいる様々な教育活動が、世界的に見るといかに教育的で素晴らしいものであるか、今回、国外へ出て日本の学校教育を客観的に見つめ直すことによって、あらためて日本の学校教育の優れた点や強みを認識することができた。

iii. チョンチョンブクト忠清北道教育庁（都市：チョンチョンブクト忠清北道）

チョンチョンブクト忠清北道教育庁を表敬訪問した【写真16】【写真17】。忠清北道は韓国の中心



写真 16 教育庁へ表敬訪問
（忠清北道教育庁）



写真 17 教育庁（忠清北道教育庁）

部に位置する人口約160万人の都市で、先端技術のインフラ整備や都市開発が進み、新経済都市として近年の発展が著しい地域である。忠清北道には小学校が260校、中学校が128校、高等学校が83校、特別支援学校が9校ある（2016年度基準）^{xiii}。2014年から2016年の忠清北道教育庁の教育成果として、国家水準学業達成度評価全国1位（2014年）、市道教育庁評価最優秀教育庁（2015年）、教育需要者満足度調査全国1位（2015年）と報告されている^{xiv}。忠清北道は韓国でも先進的な教育の実践地区であり、この地区を中心に韓国型の教育モデルを構築しようと試みている。

以上のように、忠清北道における教育実践の成果は韓国内でも際立っており、韓国の教育の中核を担っている。したがって、忠清北道地区の教育から韓国の学校教育の全体像を見ることはできないが、韓国の学校教育をリードしている取り組みや実践例について見聞きする機会を得たことは、非常に意義深かった。忠清北道では、子供たちに未来型学力を身に付けさせていく教育活動に力を入れており、さらには、幼小連携や小中連携教育などを通じて、早期段階から教育課程の充実や工夫を図っていた。忠清北道の教育紹介ビデオに示された「子供たちが笑うと、世界が喜びに満ち溢れる」というメッセージに、忠清北道の教育観が込められているようで印象に残っている。

忠清北道では、以下に紹介する陽青中学校と陽青高等学校の2校を訪問し、

学校施設見学、授業参観、生徒・教員との交流活動会等を行った。

iv. 陽青中学校^{キョンチン}（都市：忠清北道^{チンギンブクト}）

陽青中学校は、忠清北道の新興産業地区に2011年に開校した公立中学校で、学級数18学級（1学年6学級×3学年）、生徒数512名、教職員数54名である。この地域は急速に開発が進み、陽青中学校を含む学校や複数の団地が周辺に建設され、人口が増加している。陽青中学校は、2016年に最優秀運営学校選定されており、さらには教育課程研究モデル校として指定されているため人気が高い中学校である。公立校でありながら、陽青中学校へ入学する目的で周辺地域に引っ越して来る家族もいるという。男女共学校であるが、学級は男女別々にクラス編成されていた。

学校の玄関を入ると、「陽青中学校へのご訪問を歓迎いたします」という日本語のメッセージが大型電子モニターに表示されており、おもてなしの心遣い



写真18 歓迎メッセージ（陽青中学校）

がうれしかった【写真18】。訪問団の歓迎式にて、キム・ドンヨン校長から次のように学校紹介があり、「楽しく学ぶ夢」、「多読・読書活動」、「生徒の自治活動」の3つが教育課程の特徴として挙げられた。また、授業方法は生徒参加型授業を積極的に取り入れているとのことである。

陽青中学校では、全教科に対して教科教室制を導入している。教科教室制とは、ホームルーム学級を中心とする授業運営ではなく、教科ごとに教室が割り当てられ、生徒が科目ごとに教室を移動して授業を受ける授業運営方法である。陽青中学校の生徒たちは毎朝ホームルームクラスへ一旦登校し、その後は各自の時間割に従って授業科目の教室へ移動する。そのため、廊下には生徒個々人用にやや大きめのロッカーが設置

されており、生徒たちは休み時間になるとロッカーから荷物を出し入れしながら教室を移動していた【写真19】。一般に、韓国の中学校では音楽、美術、科学、英語、数学などの科目で移動教室を設けることがあるが、陽青^{キョンギン}中学校では全教科で教科教室制を実施しており、これは韓国でも特別な取り組みとして高く評価さ



写真19 廊下に設置された生徒個人用ロッカー（陽青中学校）

れ、教科教室制運営優秀校に選定されている。生徒の夢や才能を育む教育活動の充実と活性化を目指し、陽青^{キョンギン}中学校では様々な挑戦に取り組んでいた。教科教室制の導入もその一つである。

英語の授業は、校内に設置された English Village へ移動し、基本的に英語で授業を受ける。韓国では英語学習は小学校3年生から始まっており、中学校入学段階では英語力に既に学力差が出ているという。そのため、習熟度別にクラス編成し、さらに1クラスの人数を半分に分けて少人数制の英語教育を徹底していた。中学1年生は週3時間、中学2・3年生は週4時間の英語授業が行われる。授業数は多くないが、少人数クラスでネイティブ教員とのティームティーチング授業を行うなど、授業運営の工夫が見られた。

授業の時間割は1コマ45分^ⅳ、7時限目までである。スポーツ活動を推進するため、6・7時限目をスポーツ活動に充てていた。7時限目以降の放課後には放課後活動が行われており、23のクラス（数学・科学・歴史研究・日本語・読書・書道・バトミントン・バスケットボール・サッカーなど）に分かれて開講されている。2017年度は214名（全校生徒の42%）の生徒が自分の興味ある分野の放課後活動に希望参加しているという。放課後活動に参加していない生徒は、私塾に通い勉強をしているという。

放課後活動の指導は、同校の教員に加え、多くの外部指導者が指導を行って

いる。韓国では、教育活動の様々な場面で外部人材を積極的に活用しており、これにより教職員の負担軽減に繋がっている。この点は、日本における部活動指導や引率に係る課題をどのように解決すべきかを検討する際に、大いに参考になるものと思われる。

続いて、自由学期制について説明が行われた。自由学期制は、韓国の学校教育において実施されている興味深い取り組みの一つである。中学1年生の2学期に実施される自由学期には、中間・期末テストがない。生徒たちは自由学期を活用して自らの進路を主体的に模索し、夢と進路を一学期間一貫して探究することが期待される。子供たちが自分の興味ある分野を重点的に深めることができるという点において、自由学期制という新しい試みには潜在的な可能性を感じる。

陽青^{ヤンチョン}中学校の学校生活に関する在校生や卒業生の声について紹介があり、「先生は生徒を愛し、努力してくれるので幸せ」、「先生たちと明るく挨拶し、コミュニケーションし、先生たちが一人ひとりを覚えてくれている」、「先生たちが家族のように対応してくれて最高だ」など、教師と生徒間に良好な人間関係と信頼関係が構築されていることが窺い知れた。実際、授業中や休み時間の生徒たちの様子は積極的で明るく生き活きとしており、教師や仲間たちと共に伸び伸びと中学校生活を過ごしている姿が印象的であった。

v. 陽青^{ヤンチョン}高等学校^{ハク}（都市：忠清北道^{チュンチョンブクト}）

陽青^{ヤンチョン}高等学校は、2010年に開校した公立高等学校で、学級数24学級、生徒数796名、教職員数73名である。隣接する陽青^{ヤンチョン}中学校から陽青^{ヤンチョン}高等学校への入学者が多く、高校3年生の進路選択では90%以上の生徒が大学へ進学している。男女共学校であるが、学級は男女別々にクラス編成されていた。ユネスコスクール^ユとして、ESD（持続可能な開発のための教育）やGCED（地球市民教育）などの先進的な取り組みを行っている。ユネスコスクールは、世界中に広がるグローバルなネットワークを活用し、地球規模の諸問題に対処できる子

供たちの育成を目指し、平和的・国際的な連携を実践しつつ新しい教育内容や手法の開発、発展を目指す学校である。

到着後、同校生徒の案内により講堂へ入ると、生徒の清らかな歌声とピアノ伴奏、伝統楽器の美しい音色による歓迎演奏会が開かれた。舞台に立つ生徒たちはいずれも凛として堂々としており、息のあった演奏に心が安らぎ引き込まれた【写真20】。



写真 20 歓迎コンサート（陽青高校）

キム・ウンシク校長の挨拶に続く学校紹介では、次のような説明があった。進路選択については、専門家による進路相談に加え、社会人に

よる講話などで手厚い進路指導に取り組んでいることが紹介された。個々の進路に合わせた教育課程の実現を目指しており、「未来を準備するオーダーメイド教育課程の運営」^{xix}を教育の柱として取り組んでいる。2011年には教科教室制全国最優秀学校表彰を受賞し、前述の陽青中学校と同様、教科ごとに生徒が教室を移動する教科教育制を採用している。校舎中央に位置する広いスペースには、施錠可能なロッカーが生徒個人に配備されており、生徒たちはここをホームベースとして各教室へ移動する。2012年には教科教室制政策研究学校に指定されており、先進的な学校教育活動の取り組みが高く評価されている。また、生徒の成長を促進する体験中心の創意体験型教育課程^{xx}や反転授業を取り入れていた。

反転授業の実践について詳しく説明があった。多くの授業で反転学習を積極的に実施しており、教師は授業の要点を15分程度の動画に撮影してまとめ、SNSにアップする。生徒たちはその動画を家庭学習として事前に視聴した上で次の授業へ臨む。家庭学習で知識習得を事前に済ませ、教室では生徒同士が協力して取り組む問題解決型学習を行う。授業では実践や討論を中心に行い、

講義にあまり時間を費やさないようにしているという。通常の講義式授業では出ることが少ない質問も、反転授業では生徒たちが事前に家で色々と考えてくるため、質問も多く、授業が活性化するという。

英語以外の外国語学習に関する説明が興味深かった。韓国では、全ての高等学校において生徒たちは日本語や中国語、フランス語やドイツ語などの第二外国語を学んでいる。中学校でも第二外国語を履修している生徒は多く、例えば、中学校と高等学校の両方で日本語を選択した生徒は、中高6年間に亘り日本語を学習することができるという。なかには、中学と高校で異なる第二外国語を学ぶ生徒や、高校で2つの第二外国語を選択する生徒もいるという。一方、日本の公立中学・高等学校の現状に目を向けると、英語以外の第二外国語を学習できる環境は十分に整っていない。この時点で、英語以外の外国語に対する知識や理解度には、日本と韓国の生徒間で大きな開きがあることがわかる。学校教育において、何を重視して教育を施すかは国によって考え方が異なるため一概には言えないが、これから先の国際社会を見据えると、日本の中学・高等学校における言語教育も、英語偏重教育から複言語教育へとシフトすることが求められるはずである。英語教育に限らず、日本の外国語教育はどの方向へ舵を取るべきか、言語政策的な観点からも議論を重ね、検討を行う必要があると思われる。



写真 21 音楽の授業風景（陽青高校）

続いて、学校施設見学と授業参観を行った。音楽の授業参観では、生徒たちは自分が演奏できる様々な楽器を持ち寄り自由に演奏していた【写真21】【写真22】。日本の音楽の授業では、生徒全員が同じ楽器を持って一斉に演奏することが多い。ところが、今回参観した授業では、写真21、写真22からも見て取れる



写真22 音楽の授業風景（陽青高校）

ように、ギター、バイオリン、フルート、リコーダー、ハーモニカなど、生徒たちは思い思いの楽器を持参して演奏しており、おそらく楽器を持参し忘れたであろう何も持たない生徒は歌っていた。音楽の授業風景は、想像以上に新鮮であった。

廊下を歩きながら教室を覗くと、教室後方に配置された背丈の高い机

に遭遇した【写真23】。面白い机があるなと思っていたら、どの教室にも胸の高さ程まである丈の高い机が教室後方に一脚ずつ必ず置いてあることに気付いた。理由を尋ねてみると、授業中に集中力が切れ、眠くなりそうになった生徒は自らそこへ行き、目が覚めるまで立って授業を受けるという。居眠り防止用に起立したまま使用する背丈の高い机には椅子がなく、目が覚めたら元の席へ戻って授業を受けるのだという。「授業中に眠るなんてもったいない。何とかしたい。」という生徒の自発的な提案から設置



写真23 丈の高い机で授業を受ける生徒（陽青高校）

が決まったという。基本的に、授業中に居眠りをする生徒はこの学校にはいないそうである。生徒の学習に対するモチベーションが高いことに加え、生徒の興味を常に引き付ける魅力的な授業を工夫し実践しているがゆえの成果であろう。

写真24と写真25は、教室内に掲示された時間割である【写真24】【写真25】。写真24には9時限目まで表示されている。実際の時間割は7時限目までが黒

월	화	수	목	금
1	영독	개론	역사	한국
2	영독	개론	역사	한국
3	영독	개론	역사	한국
4	영독	개론	역사	한국
5	영독	개론	역사	한국
6	영독	개론	역사	한국
7	영독	개론	역사	한국
8	수학	국어	수학	국어
9	영어	영어	영어	영어

写真 24 教室内に掲示された時間割 (陽青高校)

시간	일과	비고
08:20	등교	
08:50-09:20	1교시	
09:30-10:20	2교시	
10:30-11:20	3교시	
11:30-12:20	4교시	
12:30-13:20	점심	
13:30-14:10	5교시	
14:20-15:10	6교시	
15:20-16:10	7교시	
16:10-16:30	청소	
16:30-17:20	병과후 학교 1교시	
17:30-18:20	병과후 학교 2교시	
18:20-19:20	식사	
19:20-20:10	다인수 참여 어간 교육개발 1교시	소인수 참여 전문강제 학습프로그램 1교시 (선택제)
20:20-21:10	다인수 참여 어간 교육개발 2교시	
21:20-22:10	(1교)학년(특수) 자기지도 1교시 (학술 동아리 자치활동)	(3학년) 다인수 참여 어간 교육개발 1교시 (학술 동아리 자치활동)
22:20-23:00	3학년 학습자 자기지도 1교시 (학술 동아리 자치활동)	

写真 25 教室内に掲示された時間割 (陽青高校)

色で、8・9時限目は青色で表示されており、7時限目までが正規の授業時間で、8・9時限目は放課後の課外授業に充てられていることがわかる。写真24の時間割の8・9時限目には「数学・国語・社会文化・英語・韓国地理・生活倫理」の科目及び自習時間が入っている。写真25の時間割は8時20分に始まり、23時で終わっている。詳しく見ると、16時10分に7時限目が終了し、16時10分から16時30分は掃除時間となっている。その後、16時30分から17時20分は放課後1時限目、17時30分から18時20分は放課後2時限目、18時20分から19時20分は夕食時間となっている。さらに夕食後、19時20分から20時10分と20時20分から21時10分には「多人数参加 夜間教室」と「少人数参加 専攻選択型学術プログラム(選択制)」が入っており、大人数クラスで学習活動が行われる夜間教室グループと少人数クラスで選択科目の学習が行われるグループとの2つに分かれて学習していることが読み取れる。さらに、21時20分から22時10分には「1・2年生: 自習・部活・自治活動」と「3年生: 多人数参加 夜間教室」が、22時20分から23時には「3年生: 自習・部活・自治活動」が入っている。韓国の高校生は大学受験を目指して夜遅くまで勉強すると言われてい

るが、^{ケンヨン}陽青高校の生徒たちも、決して例外ではなさそうである。

次に、日本語の授業を見学した【写真26】。第二外国語として日本語を選択している生徒たちの授業である。教師は、映像と音声を駆使した電子教材を効果的に活用していた。この日の授業では、「今日・プレゼント・もちろん・うれしい・ええと」などの新出単語を学習していた。簡潔で身近な会話内容で、生徒たちは楽しそうに日本語を学んでいた。

最後に、^{ケンヨン}陽青高校にあったユニークな部屋について紹介する。卒業生が使わなくなった制服を提供し、在校生が成長に合わせてこの部屋にある

制服を格安 (200~400円程度) で購入できるというリサイクル制服が置かれた部屋である。生徒はこの部屋を訪れ、まるで脱皮したかのように一回り大きめの制服に着替えて出ていくという。不要になった制服を必要な生徒のためにリサイクルし、格安で販売するこの部屋は、成長期の高校生にとっては利用価値が高く、実用的であると思われる【写真27】。

vi. 英語村 (Cheongju English Center)

韓国では英語教育の質的向上を目指し、実践的な英語の活用場として韓国全域に複数の英語村を設立した。今回訪問したのは、Cheongju English Center である【写真28】【写真29】。立派な建物の中には複数の部屋に分かれており、毎



写真 26 日本語の授業風景 (陽青高校)



写真 27 制服のリサイクル室 (陽青高校)



写真 28 英語センターの入口
(Cheongju English Center)



写真 29 英語センターの建物
(Cheongju English Center)

日 9 時から16時まで、11コースの授業を開講している。この施設だけで10名のネイティブ教員と5名の韓国籍教員が常勤で配属されているというから驚く。Cheongju English Centerの主な利用者は小学生と中学生である。申込みは個人がホームページで行うか、学校を通じて申し込むことも可能である。3日間集中の講座は、校外で学ぶ効果的な英語学習機会の一つとして公に認知されており、保護者を通じて学校へ届け出ることによって欠席にならない配慮ある取り扱いがなされるという。国の補助金が充てられているため、生徒は全額無料で受講することができる。このような英語村の利用推進制度も、韓国の英語教育の充実と英語力向上に大いに貢献しているといえる。



写真 30 各教室への案内表示
(Cheongju English Center)

館内に入ると、各部屋へ誘導する案内表示がある【写真30】。市役所や家庭のリビング、数学や音楽教室などを模した各部屋では、場面や状況に合わせた会話を英語で楽しみながら行うことができるようになっていいる。例えば、Dental Clinicの部屋に入ると、子供たちは受付係、患者、医師などの役になりきって英

語でやり取りを行う。*Receptionist*: “May I help you?”- *Patient*: “Yes, I need to see the doctor.”- *Receptionist*: “Please write your name and age here.”- *Patient*: “OK. (Patient writes down name and age.) ” - *Receptionist*: “Please sit down and wait for a while.”- *Patient*: “Thank you.”といったやりとりを実際に行動しながら英語で会話する【写真31】【写真32】。また、買い物エリアでは、果物や野菜、Tシャツや鞆など様々なものが陳列されており、そこには値段も表示されている【写真33】【写真34】【写真35】。実際の購入場面をイメージし、写真35のような英語での会話を通じて、物の名前や買い物の方法、値段の表現方法を英語でどのように言うのか等、体験的に学ぶのである。

日本にも、このような英語村が公的な施設として設立されることを強く希望



写真 31 Dental Clinic 教室入口
(Cheongju English Center)



写真 32 Dental Clinic 教室内
(Cheongju English Center)



写真 33 Shopping 教室内
(Cheongju English Center)



写真 34 Shopping 教室内の商品値札
(Cheongju English Center)



写真 35 Shopping の会話表現例
(Cheongju English Center)

する。実際の使用場面に近い環境で英語をより実践的に学ぶことで、子供たちの英語学習に対するモチベーションや興味を引き出し、英語力の向上へと導く力強い原動力となるであろう。

vii. ホームビジット (都市：忠清北道^{チョンギンブクト})

韓国は筆者にとって今回が初めての訪問にあたり、それまでは近くて遠い国であったが、ホームビジットを通じ、人と人が心と心で繋がる大切な時間を過ごすことができた。

韓国の一般家庭を訪問し、会話や手料理を通じて温かなおもてなしを受けた。韓国の家族の様子や日常生活の一部を垣間見ることができたことは大変貴重な経験となった。韓国の伝統的な家庭料理であるキムチやサムゲタンを美味しく頂き、食卓を囲む家族の和やかな雰囲気を味わうことができた。韓国ではキムチを毎日食しているようで、各家庭にはキムチ専用の冷蔵庫があるという。訪問した家庭にも大きなキムチ専用冷蔵庫があり、約一年分を一時期にまとめて漬け込む習慣があるという。おふくろの味として各家庭によって味付けが異なっており、キムチにはその家庭の味が受け継がれているそうである。訪問先で並べられたキムチも5種類ほど様々で、どれも少しずつ食材や味付けが異なっており美味しかった。サムゲタンは韓国料理の一つで、鶏肉に高麗人参、ニンニク、もち米などを入れて煮込んだ薬膳スープである。時間をかけて煮込んだ鶏肉はとても柔らかく、訪問家庭の母親の優しさと温もりが伝わってくる手料理であった。

ホームビジットでは、親が子を愛する気持ちや子供の成長を強く願う思い、子が両親を尊敬する心や家庭を包み込む穏やかな温かさは、世界共通の温もりなのだと実感した。訪問先には高校2年生の双子の兄弟がおり、兄は柔術を学

ぶスポーツ青年で、将来の夢は消防士になることだと語ってくれた。弟は社交的な性格で、将来は漫画家になりたいと語っており、創造性溢れる見事な水彩画作品を次々と見せてくれた。個性豊かな優れた作品の数々は芸術的な才能に満ち溢れており、将来の夢の実現が楽しみになった。

陽青高等学校に通う二人は第二外国語として兄は中国語を、弟は日本語を熱心に学んでいた。なぜ日本語を第二外国語として学ぶことにしたのかを尋ねてみたところ、「好きなテレビゲームがあり、そのゲームは日本語版しか発売されていない。ゲームの字幕を日本語のまま理解するためにも、日本語を熱心に学んでいる」という高校生らしい理由を笑顔で語ってくれた。彼の日本語は既にかかなり洗練されており、流暢さと語彙力の高さには目を見張るものがあった。言語だけでなく、日本の文化や社会にも関心が高く、友人らとこれまでも何度か日本を訪れているという。高校生の段階から、丁寧な敬語を用いて美しい日本語を話すことに驚きと感動を覚えた。

日本では第二外国語を履修させている公立学校は少ないが、韓国では中学・高等学校で一般的に国語と英語に加え、第二外国語教育を実施しており、多くの中学生・高校生が英語以外にも一つの外国語（主に日本語、中国語、+他の外国語の中から一つ選択）を学び身に付けている。グローバル化が加速する国際社会において、今後を見据えた言語教育政策の在り方とその重要性についても、あらためて考える良い機会となった。

日本と韓国の小学校英語教育

韓国は、国際化と情報化に重点を置いた取り組みを国家戦略として行っている^{xxi}。英語教育に関しては、1) 小学校3年生から英語教育開始、2) 英語専科教員・ネイティブ教員の積極的活用、3) 英語体験施設（英語村）の開設、4) 教員研修の充実、5) デジタル英語教材の開発などが特色として挙げられる。

まず、英語教育の開始学年・授業数・指導者について考察する。韓国では

1997年に小学校3年生から英語教育を必修化し、現在は小学校3・4年生で週2時間、小学校5・6年生で週3時間実施されている^{xxii}。小学校英語は学級担任ではなく、英語力に優れた専科教員とネイティブ教員が中心となって授業を行っている。基本的に授業は英語で行われ、ネイティブ教員は単独で授業を任せられる。一方、日本では2011年に小学校5・6年生の外国語活動（週1時間）が必修化した。今後は2020年に小学校3・4年生で週1時間の外国語活動、小学校5・6年生で週2時間の外国語科が必修化される。指導は原則として学級担任が行っており、ネイティブ教員が指導を行う場合はALTとして学級担任を補助し、単独で授業を任せられることは一般的にはない。

以上のように、小学校英語の指導者を比較すると、韓国では英語専科教員とネイティブ教員が中心となって英語で授業を行っているのに対し、日本では主に学級担任が授業を行っており、専科教員の数は極めて少ない点が大きく異なっている。

次に、英語教育を充実させるための工夫や取り組みについて考察する。韓国には「英語村」と呼ばれる施設が韓国全域に約30カ所存在する。英語村とは、主に小学生や中学生を対象とした公的な英語体験施設で、子供たちが実用的な英語に触れる機会を増やすことを目的としている。英語村では3日間集中のカリキュラムが充実しており、様々な体験（ホテルのチェックイン、レストランでの食事、映画館への入館、銀行での預金、ショップでの買い物）など実生活に近い環境を過ごすことにより、英語力や表現力を磨いていく。政府や学校は、英語村での英語体験学習を児童・生徒に推奨しており、そのための支援策も充実している。例えば、英語村の利用料は国の補助により無料であることや、英語村での体験は英語学習の一環として位置付けられるため、英語村体験で学校を欠席した場合も、保護者の申請により欠席扱いとはならない。

最後に、デジタル英語教材の開発について論じる。韓国では、教師や生徒用のデジタル教材が充実しており、この点も韓国の英語教育の底上げに貢献している。英語教科書には音声CDが付属されているため、子供たちは教科書の英

語音声にいつでも触れることが可能である。英語教育において音声の充実は極めて重要であり、音声のない英語教育はあり得ない。勿論、コストの問題は無視できないが、日本の英語教育においても、教科書の英語音声CDが手軽に入手できる環境を早急に整えたいものである。

おわりに

「速く行くなら一人で行け。遠くへ行くならチームで行け。」韓国教育部国際協力官チェ・ヨンハン氏が歓迎晩餐会の挨拶で述べられた言葉が強く心に響いた。教育は世界共通の事業であると言われており、グローバル化が加速する現代において世界を平和で持続可能な社会へと導くためには、各国がチームとして手を取り合い、地球規模の問題解決に取り組む能力や資質を備えた子供たちの育成に各々が取り組んで行くことが重要であると感じている。今回の学校教育視察において、「地球市民教育」という言葉を何度か耳にした。地球市民教育とは、「教育がいかにして世界をより平和的、包括的で安全な、持続可能なものにするか、そのために必要な知識、スキル、価値、態度を育成していくかを包含する理論的な枠組み（文部科学省 日本ユネスコ国内委員会 参考5より）」を意味する。我々教育関係者は、自国の子供たちの未来が希望に満ちたものとなるよう日々の学校教育に情熱を捧げる一方で、「持続可能な開発のための教育」、「地球市民教育」という観点をも同時に持ち合わせた教育を実践していくことが今後ますます重要となるであろう。各国の伝統や文化、歴史や言語を大切に維持尊重しつつ、地球市民という視点から平和で持続可能なグローバル社会の在り方について子供たちと共に考え続けるということは、大変意義深いことである。

今回初めての訪韓であったが、7日間の韓国訪問を通じて学び得たことは、韓国の学校教育動向、英語教育事情、第二外国語教育政策、持続可能な開発のための教育、地球市民教育、異文化理解、生活様式理解、伝統文化理解、人間

理解等と多岐に亘る。今回の視察における気付きをさらに醸成させ、今後の日本の学校教育や英語教育のさらなる充実と発展に役立てたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、韓国政府日本教職員招へいプログラムでお世話になった国際連合大学、ACCU (Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO)、KNCU (Korea National Commission for UNESCO)、文部科学省、韓国教育部、^{チェンギョンブクト}忠清北道教育庁、ソウル及び^{チェンギョンブクト}忠清北道の訪問校等、多くの関係者の皆様に心より感謝の意を表す。特に、プログラムに終始同行くださったACCUの齋藤盛午氏、通訳のパク・ミナ氏、ガイドのソウ・ミスク氏には、韓国の教育事情や文化、生活に関する様々な解説を戴いた。また、日本全国から集った49名の優秀な教職団員の皆様に心からお礼を申し上げる。素晴らしい先生方と共にプログラムを成功裡に遂行し、日本の学校教育への熱い思いを深く語り合えたことは、このプログラムのもう一つの大きな成果である。今後も皆様との出会いと繋がりを大事にしていきたい。

日本そして韓国で出会った皆様方のご尽力と力添えにより、7日間の韓国訪問は忘れ得ない貴重な思い出と共に大変充実したものとなった。ここに重ねて心からの敬意を表し、感謝とお礼を申し上げる。

(注)

- i UNESCO (United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization: 国際連合教育科学文化機関) は、未来への持続可能な社会を構築するために必要な教育としてESD (Education for Sustainable Development) を推進している。2005年から2015年までの10年間は「国連ESDの10年」として、環境、エネルギー、国際理解などの教育や経済に関わる取り組みとして、世界中で推進されている。
- ii 日本ユネスコ国内委員会によると、GCED (Global Citizenship Education: 地球市民教育) とは、「教育がいかにして世界をより平和的、包括的で安全な、持続可能なものにするか、そのために必要な知識、スキル、価値、態度を育成していくかを包含する理論的な枠

- 組みである。教育の質を向上させるものとしてESDと併記されてターゲットに明記されている。」と説明されている。（出典：文部科学省ホームページ 日本ユネスコ国内委員会 参考5より）
- iii 井上久雄（2007）『大教育者のことば』のp.259より引用。
 - iv 財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia/Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、アジア太平洋地域において教育分野の専門家による教育協力、文化交流、人物交流を促進するために日本政府の支援のもと、国際交流事業を展開している機関である。
 - v 中国の学校教育視察については、太田かおり（2013）「中国における教育政策の動向—中国学校教育視察の記録および教育に関する一考察—」『九州国際大学社会文化研究所紀要』71号のp.1-p.30に詳しく報告している。
 - vi 注iに示したとおり、UNESCO（United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization: 国際連合教育科学文化機関）は、未来への持続可能な社会を構築するために必要な教育としてESD（Education for Sustainable Development）を推進している。2005年から2015年までの10年間は「国連ESDの10年」として、環境、エネルギー、国際理解などの教育や経済に関わる取り組みとして、世界中で推進されている。
 - vii 注iiに示したとおり、日本ユネスコ国内委員会によると、GCED（Global Citizenship Education: 地球市民教育）とは、「教育がいかにして世界をより平和的、包括的で安全な、持続可能なものにするか、そのために必要な知識、スキル、価値、態度を育成していくかを包含する理論的な枠組みである。教育の質を向上させるものとしてESDと併記されてターゲットに明記されている。」と説明されている。（文部科学省ホームページ 日本ユネスコ国内委員会 参考5より引用）
 - viii 「国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書」のp.37を参照。
 - ix 筆者による視察記録及び「国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書」にて筆者が報告した内容にさらに加筆及び新たに執筆したものである。
 - x 文部科学省ウェブサイト「韓国における小学校英語教育の現状と課題 参考資料4-1 暫定版」のp.2を参照。
 - xi 日本全国の小学校数については、文部科学省ウェブサイト「文部科学統計要覧（平成28年版）」の「4. 小学校」を参照。（http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1368900.htm）
 - xii 韓国では、給食の配膳員や守衛・保安員などの外部職員に、再雇用人材を積極的に活用している。
 - xiii 筆者による視察記録及び「プログラム資料集 2017日本教職員韓国訪問プログラム」のp.46を参照。
 - xiv 筆者による視察記録及び「プログラム資料集 2017日本教職員韓国訪問プログラム」のp.21-22を参照。

- xv 筆者による視察記録及び「プログラム資料集 2017日本教職員韓国訪問プログラム」の p.24-26を参照。
- xvi 韓国の中学校における授業1時間は、45分が標準である。
- xvii 筆者による視察記録及び「プログラム資料集 2017日本教職員韓国訪問プログラム」の p.27-28を参照。
- xviii ユネスコスクールは、世界中に広がるグローバルなネットワークを活用し、地球規模の諸問題に対処できる子供たちの育成を目指し、平和・国際的な連携を実践しつつ新しい教育内容や手法の開発、発展を目指す学校である。世界182カ国で10,000校以上のユネスコスクールがある。日本国内のユネスコスクール加盟校数は平成29年時点で1034校であり、一カ国当たりの加盟校数としては世界最大である。
- xix 「プログラム資料集 2017日本教職員韓国訪問プログラム」の p.28を参照。
- xx 筆者による視察記録及び「国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書」の p.10を参照。
- xxi 西子みどり（2011）『韓国に学ぶ英語教育』の p.31参照。
- xxii 松本麻人（2017）「韓国の教育事情」（平成29年6月10日 事前オリエンテーション配布資料）の p.17参照。

参考文献

- 井上久雄（2007）. 『大教育者のことば』, 致知出版社.
- 太田かおり（2013）. 「中国における教育政策の動向—中国学校教育視察の記録および教育に関する一考察—」『九州国際大学社会文化研究所紀要』 71, 1-30.
- 国際連合大学, 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）（2017）. 『国際連合大学2016-2017年国際教育交流事業 韓国政府日本教職員招へいプログラム実施報告書』, ACCU.
- 西子みどり（2011）. 『韓国に学ぶ英語教育』, 東京図書出版.
- 松本麻人（2017）. 「韓国の教育事情」（平成29年6月10日 事前オリエンテーション配布資料）, 文部科学省ウェブサイト. 「文部科学統計要覧（平成28年版）4. 小学校」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1368900.htm（最終閲覧：2017年12月20日）
- 文部科学省ウェブサイト. 「日本ユネスコ国内委員会 参考5 GCEDについて」
<http://www.mext.go.jp/unesco/002/006/002/003/shiryo/attach/1356893.htm>（最終閲覧：2018年1月8日）
- 文部科学省ウェブサイト. 「韓国における小学校英語教育の現状と課題 参考資料4-1 暫定版」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/05120501/s004_1.pdf（最終閲覧：2017年12月20日）
- KNCU（Korea National Commission for UNESCO）（2017）. 『プログラム資料集 2017日本教職員韓国訪問プログラム（2017年7月11日～17日）』, KNCU.